雑学書庫 知識の記録

視線だけを移すピントの技法、ラックフォーカス（Rack Focus）

記事のURL
https://www.gklibrarykor.com/ja/article/11618/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

映画を観ていて、画面の中の人物ははっきり見えるのに背景はぼんやり霞んでいて、ふとピントが奥へするりと移り、別の人物の顔が鮮明になる場面に出会ったことがあるでしょう。カメラは動かないのに視線だけが移ったようなこの瞬間、観客はセリフ一つなくても物語が向きを変えたことに気づきます。この技法がラックフォーカス（Rack Focus）です。一つの連続した撮影の中でレンズのピントを変え、くっきり見える対象を別の対象へ移す方法で、カットを割らなくても観客の目を狙った場所へ正確に連れていけます。ピントを送るという意味で、フォーカスプル（Focus Pull）とも呼ばれます。 本記事では、ラックフォーカスがどんな原理で可能になるのか、どんな物語を伝えるのに使われるのか、実際の映画ではどう活用されてきたのか、そして撮影現場では誰がどのように行うのかを順に見ていきます。ピントを移して視線を導く技術 ピントが移る仕組み ラックフォーカスは、レンズでピントが合う距離を撮影の途中で変えることです。ただし、効果が目に見えるにはピントの合っていない部分がはっきりぼける必要があるため、画面のくっきり見える範囲が狭い環境が向いています。 （1）浅い被写界深度（Shallow Depth of Field）被写界深度とは、ピントが合っているように見える距離の幅のことです。絞りを大きく開き（f/1.4〜f/2.8程度